

県中教研 技家(家庭)部会だより

第 35 号

発行日 令和2年3月
発行所 富山市千歳町1-5-1
富山県中学校教育研究会
編集責任者 市岡きぬえ
題 字 金山 泰仁 先生

消費者教育の充実に向けて

指導主事 萩中 弘恵

経済の好循環を生み出すには家計消費の安全・安心が欠かせません。しかし、最近ではインターネット利用の拡大とともに、急速にキャッシュレス社会が進行し、品物を確認せず購入したり、金額を気にすることなく決済したりするなどの問題が多く見られるようになりました。社会のデジタル化に伴い、次世代を担う子供たちへの教育に携わる我々教師の責任の重さを改めて実感しています。

新学習指導要領の全面実施が一年後に迫ってきました。今年度は「消費生活」に関する授業研究が数多く実践されました。令和4年には成年年齢が引き下げられます。売買契約等の学習が小学校で新設され、消費者教育では小学校からの学びをつなげた授業改善が求められています。移行期間である今年度は、教える側の知識の不確かさや未知の事項への不安が多く聞かれましたが、部会員が協働して教材開発、授業構想に取り組まれていることに、今後の消費者教育推進への力強い手応えを感じました。

また、授業後の協議会では、小中の系統性を踏まえて問題提起する発言や授業での生徒の姿と自校の生徒の実態を基にした意見交換が活発に行われました。今後の授業改善に向けて前向きに取り組む意欲が感じられ、心強く思いました。「今回の実践が来年通用するとは限らない」と実践を振り返った授業者の言葉が今も心に残っています。指導者も時代の変化を受け止め、学び続ける姿勢が必要だと再認識しました。

学んだことを実生活で生かすことのできる力を身に付けることが求められる今、社会科公民的分野の指導者との連携、専門的知識を補う外部講師の活用等、消費者教育に係る様々な取組の在り方に視野を広げ、家庭科教育における消費者教育の一層の充実を図っていきたいと考えます。

(西部教育事務所)

「主体的・対話的で深い学び」に向けて

県部長 市岡きぬえ

今年度は研究主題を「『いきてはたらく力』につながる技術・家庭科の教育の推進～生活にいかすための問題解決的な学習の充実～」として研究に励み、特に、主体的・対話的な学びを意識した授業づくりに努めてきました。

東部地区大会では「我が家の雑煮レポート」を基に思考ツール：同心円チャートを活用しながら自分の考えと他の考えとの違いをグループ内での発表や話し合いの中で気づき、認め合っていました。個からグループそして全体へと考えが広がり最後に再び個に戻る課程で自分→地域→日本の食文化と思考が深まっていく様子が見受けられました。

西部地区大会では、今後より一層多様化する購入方法や支払い方法について具体的なモデルを設定した学習活動が仕組まれていました。それにより生徒たちは課題を自分の身近な問題と捉え、活気のあるグループ学習が展開されました。また、授業の流れの中で、生徒の意見を聞きながらも教科としてのポイントをしっかり押さえられており今までの指導の蓄積が現れていました。

アドバイザーの荒井紀子先生からは「主体的・対話的で深い学びのためには、教師の教科力が問われる」という言葉に感銘を受けました。

まず、私たち教員自身が教科の内容理解のために広い視野で探究心をもち続け研究し、実践してみることが大切であると実感しました。日々の多忙に追われる中、まず私たちが家庭科を楽しむことが授業力の向上につながるのではないかと考えます。

(黒・宇奈月中)

第63回 研究大会報告

東 部 地 区 10月17日(富・新庄中)

富山市立新庄中学校において草原亜希子教諭による研究授業が行われた。「地域の食文化や行事食のよさとは何だろう。～受け継ぎたい雑煮を考えよう～」という学習課題のもと、事前に長期休業の課題として取り組んだ「我が家の雑煮レポート」を参考にグループで発表し、出てきた意見をワークシートに書き込みながら、新たな気付きにつなげたり、自分の考えを深めたりする生徒の様子を参観できた。本授業では、生徒にとって身近な行事食である雑煮を取り上げることで学習課題への意欲につなげたり、我が家の雑煮を事前に調べることで生徒自らが必要感をもって課題に取り組めたりできる工夫がなされていた。話し合いの場面では、ワークシートに書かれたキーワードをもとに「受け継いでいきたい雑煮」について理由を大切にしながら考えることで実生活と結びつけ、生き生きとグループ活動に参加する生徒が多く見られた。また、思考ツールとして同心円チャートを用いることで言語活動が活発になったり、意見を整理したりするのに効果的であった。「受け継ぎたい雑煮」を全体で共有した際には、多くの意見を聞きながら日本の食文化を大切にしたいと思った生徒や実生活に活かそうとする生徒の姿勢が多く見られる授業であった。東部教育事務所の高橋真理子指導主事からは、生徒の思考の深まり方や今後の食生活に生かす工夫について助言をいただいた。限られた時間の中で学習内容を網羅するための工夫等今後の課題について、研修を深めていきたい。

部会協議では、アドバイザーの荒井紀子先生より「主体的・対話的で深い学びを実現する家庭科の授業づくりと評価」をテーマに講演していただいた。生徒にとって深い学びをつくるためにはどのように学ぶかが大切であり、授業の組み立て方の工夫について考えるよい機会となった。

水上早紀子(富・八尾中)



西 部 地 区 10月16日(高・南星中)

高岡市立南星中学校において長谷川文代教諭による研究授業が行われた。「インターネット販売で購入する商品の支払い方法を考えよう」という課題の下、生徒が様々な支払い方法について、その利点や問題点について考え、理解を深める様子が参観できた。一人暮らしの大学生という具体的なモデルを設定したことで、生徒がワークシートに自分の意見を書いたり、班で話し合ったりする際に、近い将来の自分の生活に重ね合わせて必要感もち、主体的に学び合っている様子が印象的だった。西部教育事務所指導主事萩中弘恵先生からは、生徒が1クリックで売買契約が成立することを理解することができた成果をもとに、プライバシーに配慮しながら実態を踏まえてモデル像を吟味すること、ストーリー性のある課題を提示することで生活に生かす問題解決型学習につながるなどについて助言をいただいた。金銭の管理、クレジットについての学習は、新学習指導要領の先行内容であり、大変提案性の高い授業であった。中学生の消費行動は個人や地域によって実態が違い、キャッシュレス社会等、消費をめぐる環境が急速に変化する中、小学校や高等学校との連携も含めて、今、中学生に何を学ばせ、どんな力を付けさせたいのかをしっかりと考え、実践することが必要だと実感した。

部会協議では、授業力向上のためのアドバイザー配置事業として、「主体的・対話的で深い学びを実現する家庭科の授業づくりと評価」と題して、福井大学名誉教授の荒井紀子先生にご講演いただいた。生徒の思考力や判断力、表現力を育む授業にするにはどのようなことが大切なのか、授業で生徒の探究を促すにはどのような視点が必要なのかなどについて、教えていただいた。具体的な実践例を紹介していただき、生徒の学びを深める授業はどうあればよいか、自分自身の授業を振り返って考えるよい機会となった。

粟原 千恵(氷・西條中)



東海・北陸石川大会

東海・北陸石川大会 第3分科会（家族と家庭生活）に参加して

「生活を創り出す実践力を身に付けた生徒の育成 ―思考が広がり・深まる指導を通して―」を研究主題として、石川大会が開催された。

第3分科会は、家族・家庭生活の領域で能美市立寺井中学校の山本梓教諭による授業提案があった。「家族・高齢者などの地域との関わりを深めよう」を題材とし、「地域の人々とどのように関わるとよいだろうか、防災訓練を通して考えよう」の課題のもと、地域の一員として中学生ができることや、高齢者や地域の人々と積極的に関わる方法や工夫を考える1時間であった。学ぶ必要感のある課題設定のもと、写真や映像を活用し、ゲストティーチャーの話やグループでの対話を通して、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて学ぶべきことの多い授業であった。



能美市立根上中学校の道越典子教諭から、家族・家庭生活の領域の実践発表があった。幼い頃を振り返るために「思い出すごろく」「いますごろく」を活用した工夫や幼児との適切な関わり方を理解させる手立てとして、言葉をリフレーミングする活動が提案された。

白山市立北星中学校の若狭弘子教諭から、消費生活・環境の領域の実践発表があった。計画的な金銭管理を考え、キャッシュレス化に対応する力を身に付けるため、カードの実物見本の分類を通して特徴を理解する活動や思考の変容を評価できるワークシートの工夫が提案された。新学習指導要領の全面実施に向けて大変参考になった。

鈴木 恵美（南・福野中）

東海・北陸石川大会 第4分科会（衣食住の生活）に参加して

第4分科会は、金沢市立清泉中学校で行われた。

研究授業は、地域の食材を使って献立（副菜・汁物）にどのような工夫をしたらよいかを考える内容だった。家庭で調べてきたことを基にグループで献立を考え、栄養教諭や他のグループからのアドバイスを参考に再度献立を工夫・改善させることによって思考を広げ、考えが深まっていた。また、電子黒板、タブレット等を活用することによって、視覚的にも分かりやすい授業であった。まとめでは「この献立の調理実習をすることが楽しみ」という感想があり、次時の調理実習の意欲へつながっていた。



研究発表では、入善町立入善中学校笹島裕子教諭が研究主題に基づいた問題解決的な学習の進め方について、実践例を交えて発表した。指導講評では、①十分な実態把握がされていること、②学習形態の工夫により多角的な見方ができること、③発信活動の充実により様々な視点で考えることができたこと、④地域との連携により環境の視点から考えることができていること、⑤生徒の言葉が多く活用されていることによって、生徒の変容が分かりやすいことについて評価された。今大会で学んだことを自分の実践で生かし、さらに研究を重ねていきたい。

今井 彩圭（魚・西部中）

第58回 全国中学校技術・家庭科研究大会 兵庫大会に参加して

第5分会では、明石市立高丘中学校の小林裕子教諭が、家族と家庭生活「高齢者など地域の人々との関わりや協働する方法について考えよう」の授業を行った。高齢者の特徴、接し方を学んだ上で、地域の一員として、普段生活している学校に高齢者が来校された時に、進んで関わる工夫を考えることができることをねらいとした授業であった。

本時では、初めに生徒がペアになり、介助の体験的活動を行った後、介護士による正しい方法を動画で確認することにより、高齢者への接し方の理解を深めた。その後、地域の高齢者にインタビューした動画を視聴し、高齢者が実際に困っていることについての生の声を聞いて、そこで出た意見をもとに、「学校行事などで高齢者が来校されることになった時に私たちにできることを考えよう」という課題に取り組んだ。

班活動や班発表では、タブレットを操作することで、思考中の意見をモニターに映して共有したり、提示資料にしたりするなど、理解が深まる手立てとなっていた。高齢者が実際に来校した場合に起こりうる3場面についての課題に取り組んだが、高齢者への理解が深まった後であることや設定場所を自分達に身近な中学校にしたことで、考えやすく様々な視点での工夫を考えることができていた。また、ワークシートは、題材を通して取り組む1枚ポートフォリオになっており、振り返りが行いやすいように工夫されていた。指導助言では、1番最初と最後の授業時に自分の考えを書くことによって生徒の伸びが分かり、個人内評価につながると教えていただいた。今後の授業研究に生かしていきたいと思う。

平 和章 (射・大門中)

新入会員紹介 フレッシュさん



射水市立小杉中学校 伊藤 雅恵

今年の4月に小杉中学校へ着任しました。初めての中学校教員としての生活は分からないことばかりで、着任した日から戸惑う毎日でした。そんな慣れない環境でたくさんの不安がありましたが、多くの先生方に助けていただきながら、少しずつ学校にも慣れることができ、気付けば2学期も終わろうとしています。技術・家庭科という教科の特性から、私は全クラスの授業に出ています。そのため、授業以外の学校生活においても多くの生徒と関わることができ、それが私の日々の喜びや楽しみとなっています。

1学期のうちは生徒の名前と顔を覚えるのに時間がかかったり、授業のリズムがなかなかつかめなかったりと、授業内容を進めていくことだけで精一杯でした。2学期に入ると授業に慣れ、学年やクラスの特徴がつかめてきて、少しずつですが、生徒の様子や反応を見ながら授業を組み立てることができるようになりました。また授業を行うときには、「どうしたら学習内容に興味をもってくれるか」「どうしたら自分の生活と結び付けて考えてくれるか」を常に考えながら授業をしています。生徒が自分自身の生活の中に課題を見付け、工夫し、実践し、「よりよく生きる力」を身に付けられるような授業ができるよう、これからも努めていきたいと思っています。